

祖父母と孫の心理的關係
孫の存在の意味

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
宮田 正子

目的

本研究では、第一に祖父母と孫の心理的關係に焦点を当て孫の存在の意味づけを構成する要因を探る。第二に孫の存在の意味について要因別に比較検討することを目的とする。

方法

幼児期の孫を持つ祖父母と青年期の孫を持つ祖父母を対象に、予備調査で作成された「孫の存在の意味について」の質問紙を用いた。2006年6月20日～9月6日の間に配布・回収した。大学構内、近郊の主要駅周辺、ショッピングゾーンなどで声をかけ、同意の得た学生、親、祖父母に対し切手を貼付した封書を直接手渡し、研究室宛に郵送をお願いした。回収207名、回収率58.2%、分析有効回答数174名。平均年齢66.6歳（SD8.9歳）。

結果と考察

因子分析の結果、孫の存在の意味を包括する5つの構造因子を抽出し、「日常生活の充実の糧」「生きる糧」「行動面の促進」「病気への支援・気遣い」「精神面の促進」と命名した。

次に、属性に関する項目を独立変数、標準因子得点を従属変数として孫の存在の意味について要因別比較のために分散分析と多重比較を行った。孫の発達段階により孫の存在の意味に違いがあるとの仮説は、青年期の孫を持つ祖父母の方が幼児期の孫を持つ祖父母より、「病気への支援・気遣い」にのみ有意に大きく、部分的に認められた。しかし、

他の4因子に有意差はなく、多くの心理的的局面について、祖父母は孫の発達段階に関係なくあるものといえた。ところが、孫の存在の意味の違いの要因において大きく影響を与えたのは、孫の続柄であった。「生きる糧」「行動面の促進」「病気への支援・気遣い」に関して、すべて娘夫婦の子どもが息子夫婦の子どもより影響が大きいことが検証された。次に、居住距離度による孫の存在の意味については、「生きる糧」は孫と同居か日帰りの範囲に住む祖父母の方が、また、「行動面の促進」は日帰りの範囲に住む祖父母の方が、歩いていける範囲に住む場合より大きく影響を受けているといえた。会う頻度による比較では、年単位での会い方は祖父母に孫の存在の意味をあまり与えないといえた。配偶者の有無による比較結果から「病気への支援・気遣い」について配偶者無しが配偶者有りよりも有意に大きく、孫達がその役目を担っていると考えられた。また、同居・非同居、祖父母の性差や孫の性差については、孫の存在の意味において関係ないことが明らかとなった。

以上の結果は、現在の親子、祖父母と孫、家族、ひいては社会の有り様の変化を示し、現在の世相の反映であろうと考えられる。本研究で検証できた孫の続柄の關係に関して興味深い知見が得られた。また、孫の存在の意味は、如何に祖父母の精神面を充実させるかを示唆するものといえる。